ここにしかない泥染めの魅力を広めていきたい

①織り上がったときにどのような模様になるかを点で表している。

② ①の表を元に絹糸を仮に織り上げたもの。締機（しめばた）加工といわれる。泥染め後は一度これをほどく。

③車輪梅の木。島ではテーチ木と呼ばれる。海岸近くの環境が厳しいところで育ったものが良い色が出るという。

④車輪梅を細かくし、せんぎん釜といわれる大きな釜で 600kg を 2 日間煮出す。

⑤車輪梅の色素が煮出された染色液。タンニンを豊富に含んでいる。

⑥空気にさらす様に、よく手を動かして液に糸を浸す。染始めは赤茶色をしている。

⑦色を定着させるために石灰液につける。この⑥と⑦の工程を 20 回ほど繰り返す。

⑧色が定着したら泥田へ糸を浸す。泥の中の鉄分が車輪梅のタンニンと結合して艶やかな黒色となる。

⑨右へ行くほど染めの回数が多い。限りなく黒に近づけるのが職人の技。

肥後染色・夢しぼり
泥染職人　山元　隆広（やまもと　たかひろ）
電話 0997-53-3458　FAX 0997-53-3428
〒894-0004　鹿児島県大島郡龍郷町戸口 2176
teba-800@po4.synapse.ne.jp　http://www3.ocn.ne.jp/~kimono

大島紬に使用される糸の染色、泥染め商品（Tシャツ・ショール・バック）制作・販売、泥染め体験

1 取材の日も、たくさんの人が訪れにぎわっていた。

2 奄美の泥は粒子が細かい。

3 ショップが併設してあり、商品の購入だけでも立寄れる。

4 肥後染色の工場内。いろんな道具が車輪梅の色に染まっている。

大島紬として全国的に有名な絹織物はこの島を長い間潤してきた産業です。

大島紬は約３０の様々な工程があります。工程の複雑さから完全に分業制となっており、その工程ごとに職人が存在します。山元さんはその中で染色（泥染め）の工程を担当する職人です。現在３４歳、奥様のご実家で、４０年ほど続く染色工場「肥後染色」で職人として働きながら、商品の企画や営業なども行っています。

◆

大島紬が他の絹織物と大きく異なる点は、泥染めという工程です。まず車輪梅（シャリンバイ）という樹木のチップを煮出した液につけた後、色止めをするために石灰液につけます。この作業を交互に２０回ほど繰り返した後、泥田につけこみます。これを１工程とし、だいたい４回（合計８０回前後）繰り返すと泥の鉄分が車輪梅のタンニンと結合して黒色へと変化していきます。

車輪梅も泥田も奄美だけに存在するものではありませんが、こういった方法で糸を染めているのは奄美大島だけです。

肥後染色では、染める部分を丁寧に選り分ける加工（締機）を施された糸を染色していきます。

山元さんは、この泥染めをTシャツ、ショールなどに施した商品を製作・販売し好評を得ています。

そして、工場では染色体験も行えます。泥染めの色の良さは、デパートなどの物産展などで評判を呼び、いろんな企業とのコラボレーションも行っているそうです。

現在、最盛期に約２０万反つくられていた紬は、２万反を割り込み一つの産業としての存在自体が危うい状況です。

前述したように大島紬は工程が複雑なため複数の職人が関わり、非常に高価になります。

しかし紬は正装ではないとされているため、公式な場にしか着物を着用する機会がなくなってしまった今日では求める人も少なくなってしまっています。

山元さんは、大島紬に携わる職人として現状を何とかしなければと思いつつ、今は家業を守っていくので精一杯だと語ります。

そのために、物産展などで全国各地を飛び回っています。

そして泥染めの色や風合いの良さ、体験の面白さは着実に伝わって来ているのを感じています。泥染めの良さを知ってもらい、それから大島紬にも興味を持っていただけたら、いいのではないかと考えています。

こういったお話を伺っている合間も、工場のある戸口集落の昔話や紬の歴史をたくさん教えていただきました。また一般的にはこう言われているんだけれど、自分はこういう風に思うなどの解釈も話して下さいました。

山元さんの表情にはこの仕事への誇りが満ち溢れています。

山元さんのような職人がいる限り大島紬の歴史はこれからも続いていくのだと感じました。

体験料金

- 泥染め…三千円
- 藍染め…三千円
- 藍＋泥染め四千円

価格は一名分。Tシャツ３～４枚で所要時間は３～４時間ほどかかる。